

地下鉄動物園前から戦火のレパノン前戦まで、荷物をめぐって話とはぶのですが、そこには共通のものがあって、それはかさりつきのない、おしつけがましくもない親切。心の体温のあたたかさともいえるべきものなのです。

「〇〇しましょう」とか「〇〇しなくてはなりません」式のおしきせの倫理観からくる「しんせつ」とはまったく別物の、本能的ともおもえる自然な親愛感、口より先からだが動いてしまふよりな連帯感なのです。つらい人生、おいつめられた状況からくる孤独や絶望の圧力の質量によって、他者をいとおしくおもひ気持ちは生じたり、自己破滅に追いこんだり、他者を蔑しめる気持ちは生じたりします。獄中の永山剛夫さんは、貧困は人間的ないつさいの感情を奪い去る、というボンガーというひとの言葉を引用して(獄中で学んだ英語で)人を殺して、まった自分自身と、自分をそのように追いこんだ社会と権力に対してたたいを停めています。ゴリキーは戯曲「どん底」の中で、革命前のロシアの憎みあいののしりあい、不信感にせめられ殺しあひつゝの狂気の絶望感をえがいていますが、——にんげんといつても、人さまの良心をあてにするもんだが、持っている当人にしちゃ良心ほど荷厄介なもんはねえと、つぶやく男に対して、巡礼の老人はしづかに語りかけます。——あの世に

大半の患者たちが、家を捨て、家族とわかれ(別に別れもあれば生き別れもある)、はげしい労働と酒で傷ついたからだでこの病院に入ってきました。退院しても、しばらくすると再発して「出もどつて」くるひとも多く、人生まっくらや、と短くなつた片足をひきずる人や、もう労働意欲もなくなつたわ、生きるのはつらいよな、と目をつむる老人もいます。ある日、つらいことがあつて詰所の洗面所で泣きくすれたわたしをみて以来、その老人は毎朝、洗面所で顔をあわすたびに、どうや元気が、と声をかけるのです。オネエサン、ほら、といつて、果物のデコレーションやらホットレモンやらサンドイッチやらをみごとに美しくおいしくつくつて差し入れたり、たまの外出日にはパチンコで人形をとつてきたりして枕もとに置いていく隣室の「弟」の正ちゃん。隣のベッドには、夕前が死んだ母とおなじで、あけつびろげなところもよく似ているので「オカアサン」ときに「オネエサマ」と呼んでいる自称「後家さん」。一日一九〇〇円でドヤのそうじをしていて、わたしと同じ過労と栄養失調から発病した人で、とっても茶目つきがあるので気があつて、それぞれの人生におこつたあれこれを語りあい、涙ぐんだり大笑いしたりの毎日なのです。「オカアサン」は尋常小学校を三年生ぐらいしか行けず、それも雨が

行つてしまえば、きつと安眠になる……要るものはなにひとつのりなるし、心配のたねもなにもない。骨にきつって骨やすめというが……そのとおりにやろうが——この世で、にんげん、どこに骨休めの場所があるね?

だれにでも親身になつてやらにゃあかん……人さまには情けをかけてやるもんじゃ! 行つたら……やさしうしてやんなよ。にんげん、やさしうされるのはすこしも毒じゃない……

いちまいのピラが雇われました。土方であつた矢鳥一夫さんが、前後不覚に酔つた状態であやまって人を殺してから六年、獄中で苦悩の中から、事件の本質と原因を追求してきた彼に対して、検察当局は計画的な犯罪であるトデツナ上げ、死刑を求刑したのです。そして一月二六日、東京地方裁判所刑事八部坂本裁判長は無期懲役の判決を下したのです。矢鳥さんはスリッパを裁判官に投げつけて罵詈雑言、傍聴者の抗議の声に全員退廷いわたし、五人が監置されたのです。政治犯にくらべて、とほしい差し入れをよろこびながらも、冬になつてこどもの衣類もないことだろう。わたしはかまわたいから、どうか子どもにやつてください、という矢鳥さんの手紙を読んだことがあります。わたしたちの「どん底」は陰を陽にかえるゆたかな力量がまだまだ不足です

が降つて野良仕事ができない日に登校したとか。つかしの歌謡曲集から好きな歌をみつけて「ちよつとノートにうへじてくんない」。わたしは読み書きに不自由していた母にたのまれて、手紙の代筆をしていた少女のところをおもいだし、なつかしくなりましたよ。

わたしたち患者の共通の楽しみは、食堂のテレビ見物です。二〇代のはじめにわたしが最初に入院した箕面の山泉の労働者病院には患者自治会があつて、阪急電車の車掌で、私鉄漫画集団のリーダーであつた中山二努さん(数年前になくられた)が入院中で面の先生。流しをやつていたお兄さんがギターの先生。十三の「ピクトリヤ」でバンドマンだつた少年がハワイアンの先生。金属の会社で働いていたおじさんが写真の先生。とじつにたくさんのお楽しみがありました。いま、私鉄総連でもピカ一の戦闘力をもつ阪急電車の労働組合の委員長という労働多の任務に推された、詩人の森上多郎さんを知つたのもその病院で、ある朝、洗面所でせんたくしてたら、大きなはにかんだよりな眼をしたひとが、「しばみつよさんでしよ」と声をかけてきて以来、多郎さんを中心の読書会で知りあつた若い労働者とは、六〇年代のはげしい時代を、ともに働き、ともにたたかつたことがあるのです。長期療養者中心であることと、定着性のある労働者が

早かったという特徴が生かされての自主的なつながりが、毎日毎日をたいせつに、おたがいを与えあうという良い作風をうみだしたのでしょう。わたしは病状がよくなってきたと、寝るとき以外は、ふだん着にきかえて、「とよすのあられ」工場ではたらいっていた同い年の女のひとと（そりいえば、そのとき彼女の病名は、今のわたしと同じ十二指腸かいよりでした）川べりを散歩したり、うぐいすの鳴き声コンクールに出演させるため、とりもちをつけた棒を手にくぐりす狩りに出かけるおじさんと山に出かけたり、ずいぶんのんびりと療養できて、月曜をちよんぎらずになおすことができたのです。二労働伯と飲みに出、仲間の漫画家たちとハンゴ酒をして、明け方こっそり戻ったのがばれて、大目玉をちようだいしたのもなつかしい思い出です。

二度目の入院は、東京でした。ベトナム反戦運動の終りとともに、人間関係もからだもガタガタにこわれ、いちばんすさんでいたときでした。パレスチナのこともたちの船と詩をみる機会があつて、心ゆさぶられ、支援を求めているかの地に、せめてメシたきくらいは出来るだろうと望んだものの、こちらの身がこわれていては、話にもなりません。泣きの涙で羽田空港をとびたつ友を見送り、その夜は、新宿ゴールデン街でパーティーをやつて

き匿をやつていた詩人の宗秋月が激励してくれたこと。ちいさな一粒の種子のように、そのときの思い出は、わたしの胸をあたためます。

テレビの話から、ずいぶんさかのぼってしまいました。

今夜はA戦後三三年、閉ざされたままの大洞穴発掘！五〇〇体の遺骨が語る玉砕の真実と銘うったパラオ島の取材番組で、食堂は満員。チャンネルをめぐってのいざこざもありません。ニイジカヤマノボレを合図の真珠湾攻撃にはじまる太平洋戦争の状況がふるいニュースでうつしだされると「場内」はシーンとした緊張感が走りまわりました。南方の海で撃沈する戦艦をみながら「わたしの思い出も戦艦大和のつとめて戦死したのよ」と隣の席のおばさんがつぶやきます。ジャングルに入った取材班が、地図をたよりに汗みどろにたつて岩肌を掘っていくと、洞穴の入り口がみつかりました。その入り口から重油を流して火を放った空きカンがころがり、洞穴の奥の方まで火炎放射器で焼かれた跡らしい赤茶色に変色した岩肌がかびあがります。鉄カブト。割れたアルミの皿。レンズが片方ついたままのめがねなどが次々とみつかかり、そのそばには、アメ色の頭がい骨がころがっていました。下あごだけ残っているものもあります。いまだに白さを

いた秋田明大さんの店で、日大全共闘の面々とさんさんわたりあつて、せまい店内を割れたグラスでめちやくちやにして、入院したのです。強いバイタリティを持った庶民の母親を演じて右に出る者はないといわれた女優の望月優子さんの厚意による入院でした。沖縄をアメリカの軍政下から解放する運動のなかで、わたしは望月さんと出会いました。音楽劇「沖縄」の上演活動に、彼女はすべてをつぎこみ、うちこんでいたのです。はげしくはつきりとした性格で、反戦の意志と信念が、からだじゅうからふきだしているようなひとでした。（作年、彼女はガンのために永眠しました。じっさいの母としての苦しみを抱えたまま。かけがえのない「日本の母」にはもろり会いことはできません）

大阪をはるかに離れた病床で、訪ねびともすくなく、看護婦さんから、九段坂病院のヒッピーさんと呼ばれて、あかるくふるまうてはいたものの、手づくりのごちそうを持参してくる同室の患者たちの家族や恋びとたちの情愛を、ふつとらやましくおもったりしていたものです。気晴しにと、散歩にさそってくれた作家の真摯な仲彦さんと、女坂周辺を歩いたこと。ひとりの闘士が片腕のとれかけた古背広で、紙袋のりんごを抱えてきて、病院の夕食を半分のこしてたべたこと。鶴橋で好み焼

とどめる立派な歯をみて「あ——若い人のやなあ」。誰からともなくため息がもれ、三三年前の情景が、戦争を経てきたひとたちの脳裏をよぎっているようでした。「オカアサン」は、目にうつすらと涙をにじませながら、「心の中で手をあわせて、般若心経をいっしんと念えとつたのよ」と言っていました。そして、三人の息子をすべて陸軍と海軍と航空隊にとられてうしなつた知りあいの女の人の話をしてくれました。B29の爆音や、予科練のうたを覚えていた程度の、一九四三年生まれのわたしは、思想をふくめての全体的体験としての戦争をしりません。ただ、たべるもののない時代に商家に生まれ、お乳もろくすつ呼吸えなかつた戦時の事情と戦後かたむく一方のくらしわきの中で身にしみたこと、現在のわたしのあり様に深くつながっています。去年、沖縄の座間見島で聞いた民宿のおばさんの話を、わたしは「オカアサン」にしました。座間見では、世界に類をみない非戦闘員の集団自決が行なわれたのです。手投弾が発射されたため生き残ったおばさんの話では、割腹、毒薬、手オノヤナタをつかつての凄惨な自決。赤ん坊の足をつかんで岩にぶつけて殺したあと発狂した父親など、阿鼻叫喚の地獄がくりひろげられたのです。いまだに、自決の現場を通るときは、目をつぶって走りぬける、と民宿のお

ばさんは言っていました。

きれいな日本語で語るパラオ島の住民たち。英語で語るその息子たち。戦争と侵略は手をかえ、髪をかえて息づいていてはありませんか。わたしたちのふだんのくらしの中にも、侵略的で排他的な、さすだすした抑圧感がひしめいているじゃありませんか。富める国は小国をおさえこみ、しほりとり、人間の解放をとなえるひとびとがファシストのように残酷非道に人を殺す。あるいは、人をきりすてたり、こきおろしたりする。パレスチナからもどって、決してひとの悪口をいうまい、ときめたために、かえっていつそ傷つくことになり。身がもたないで、こまっています。話しても話しても通じないかなしさは怒りになって爆発し、その破片は自分につきささります。わたしもまた鬼となり、夜叉となって自分の生きどもを喰い、くろい血を吸っているのです。

イランのパーレビ王制が打倒され、あらたな革命期をかかえたアラブから、PLO東京事務所のハミード所長が帰ってこられました。そして今日、この病院にこられたのです。入院して間なしのころ、とつぜん、美しい盛花が届いてびっくり感激のダブルパンチ。いままた、ここで出会った友人、同盟の副長で詩人のマインさんや、

どもを育ててくれている友人たち。近くから、遠くからやってくる友のやさしい言葉や激励が、どんなにうれしいことか。この病院の内なる釜ヶ崎と外なる釜ヶ崎のひとびとの心底からのやさしさ、えげつなさ、おもしろおかしいこと、みんな教えられ、教えあってきました。

退院して最初の仕事は、映画「丸正事件」の制作協力です。友人の李学仁監督はじめ、望月優子さんやパレスチナへのかかわりを通して知りあったひとびとと又、再会できるのです。「労働者渡世」の気風に甘え、五枚が十枚、十枚が二十枚と、身の上話をダシに二十五枚。およそ一万字分、紙面をおじゃますることとなりました。想いのとどままだあれやこれ、かまえず、無邪気につづらせていただきました。えんぴつ走らせている間、「はより書きんしゃい」とお茶と食事を運んでくれたオカアサンありがと。『渡世』のみなさん、こんごともどろぞよろしく。

一九一九年二月

画家のモナさんら、パレスチナのひとびとからの心のももった激励の伝言をきき、わたしはうれしさに泣けてしまいました。帰国後激化した内戦に、くわえてイスラエルのリタニ河を越境しての攻勢に、多くの人命が奪われました。わたしが会ったコマンド(戦士)やこどもたちの中にも、その犠牲となった人もいることでしょう。ベツドのまわりに貼った写真から、ハッタを巻き、Vサインをかかげたコマンドの笑顔がこちらをみています。フィリップンから届いた年賀状が、「人民に力を！愛を！」と告げています。

釜ヶ崎の解放と、全世界のもっともしいたげられた人びとの解放を夢みながら、皇太子の沖縄訪問に抗議の焼身自殺をとげた船本州治さんの、人間くさい言葉がきこえます。

ひざを屈して生きるより、立って死ぬことをえらぼりと、朴軍事政権下の労働監獄でたたかひ李小仙オモニや、第一紡織の娘たちの叫びは玄海灘をゆさぶります。

希望は、つくらなければならぬのです。絶望や空虚いや「虚無すらない虚無」の中で生死の境目を生き、たかりひととは、かならずつながります。ふみしだかれた屍、病みおとろえた頬に、春はまっさきに訪れるでしょう。入院中、ぎりぎりのくらしにもかかわらず、こ

御握り屋コーナー

グラタフな御握り屋はあいかわらう、チンクラウチンクラウの売をせつてします。

高橋の他に、今年一月からウチ帳をつくり、カナルブーと決着したので、アブレをもらえるほどには効いていません。四月二日からは子供二人とも保育所に入るので、もつとセンターに出れる見込み。店はカーチャンがやりま。

水曜日か休み。十時半から一時まで、というのが、店に確定している時局です。ヨロシク。

渡世バツクナンバー

二五〇二二七〇二八〇二九〇三〇あり

獄中者組合パンフ

「犯法」第十八号、第十九号、三〇三〇三

以上の他に伊豆本も若干ありキマッ。二冊五〇円。期限は新になし。御握り屋